

水とともに生きる幸せを未来へ

筑波大学附属中学校

二年三組

荒井 雅佳

東京で育った私は、清潔な水がいつでも使えることを、当たり前のように受け止めていた。水は、体を洗い、食事を作り、衣類を洗う、衛生を保つために欠かせない存在。けれど、その水がどれほど貴重で、どれほど多くの人の努力によって支えられているかを、深く考えたことはなかった。

幼稚園の頃、友人に誘われてユニセフの募金活動に参加した。通りすがりの人に声をかけるのは緊張したが、「頑張っ
てね」と優しく声をかけてくれる人もいて、胸の奥がぽろぽろと温かくなった。活動の終わりに、引率の方々が「世界には、きれいな水を飲めない子どもたちがたくさんいる」と話してくれた。その言葉に驚いた私は、家に帰って母に尋ねた。母はアフリカのある国の写真を見せてくれた。そこには、大きなポリタンクを持って何キロ

も歩く子どもたちの姿があり、しかも汲んできた水は濁^どっていて病気になることもあるという。その現実を知ったとき、自分が「当たり前」だと思っていたことが、世界ではまだ当たり前ではない現実があることに気づいた。小学校の社会科で「玉川上水」について学んだとき、玉川兄弟が多摩川の水を江戸まで引く水路を築いたという話に強く惹かれた。も？と知りたいたいと思い、東京歴史博物館にも足を運び、玉川上水や江戸の水道の仕組みについて詳しく調べた。展示では、江戸時代の人々がどのようにして水を確保していたのかそして玉川兄弟がどれほどの困難を乗り越えて水路を完成させたのかが、模型や資料を通して生き生きと伝えられていた。山を削り、川を渡り、地形に合わせて水の流れを調整しながら、何年もかけて築かれたその水路は、江戸の人々に清潔な水を届ける命の道だった。それは単なる土木工事ではなく、人々の命を支える使命だったのだと知り、私は胸をおた

れた。

現在の東京の水道も、たくさんの方の働きによって成り立っている。浄水場で水をきれいにする人、水道管を点検する人、災害時に復旧作業をする人。水道の仕組みは非常に複雑で、どこか一箇所でも問題が起きれば、私たちの生活に大きな影響が及ぶ。私たちが安心して水を使えるのは、そうした人たちの支えがあるからだ。見えないところで働く人々の存在に、私は深い感謝の気持ちを抱くようになった。

家でニュースやドキュメンタリーを見たり、家族と話し合ったりするうちに、私は環境問題に関心を持つようになった。ある日、SDGsの特集番組を見て、「安全な水とトイレを世界中に」という目標があることを知った。その瞬間、幼い頃に募金活動で聞いた「きれいな水を飲めない子どもたちがいる」という言葉がよみがえった。水は命を支えるものであり、衛生や健康、農業、工業、教育など、

あらゆる分野に関わっている。水の問題は、遠い国の話ではなく、私たちの暮らしにも深く関わっているのだ。

日本でも、豪雨や地震などの災害によって水道が止まることがある。数年前の台風の際、断水が起きて給水車が来るまでの間、ヤットボトルの水を分け合いながら過ごしたという話を聞き、私も「水があることのありがたさ」を改めて実感した。その経験をきかけに、我が家では災害用の水を備蓄するようになり、

普段の生活でも節約を心がけるようになった。歯みがきのときはコップを使い、洗濯にはお風呂の残り湯を活用するなど、小さな工夫を積み重ねている。こうした家庭での取り組みが、世界の水問題への意識につながっていると感じる。

水は命をつなぐもの。その尊さに気づいたあの日の感動は、今も私の心に深く刻まれている。これから水を大切に使い、支えてくれる人々への感謝を忘れずに暮らしてい

きたい。そして、未来を生きる子どもたちが
清潔な水を「特別なもの」ではなく「日常」
として受け取れるように、私は日々の行動を
通して、水とともに生きる幸せを未来へつな
げていきたい。